永野 茂洋

1. アジアにおける「キリスト教土着化論」から「民衆神学」への展開

民衆神学は、キリスト教の土着化論（西欧文明化論）の認識の枠組みの中に、近代化（を主導するエリート層）と土着文化の中を生活している民衆との間の政治的・階級的な対立構造を組み込む。→今日のアジアの/における/神学を特徴づけた

2. 民衆神学が課題としたこと

- ① 抑圧と貧困という民衆の状況を神学的にどのように理解するか？
- ② 聖書における民衆、イエスと民衆との関わりを聖書学的に明らかにすること
- ③ 聖書におけるイエスと民衆との関わりを、アジアの民衆と教会の宣教との関わりに対比させること
- ④ 「解放の神学」の助けを借りてアジアの状況の中での民衆の役割を積極的に評価していくこと

3. 宋泉盛（C. S. Song）の問題意識

西欧のキリスト教救済史観では、非キリスト教的な国々の文化や伝承は、救済史によって克服されるべき「世俗世界」であり、かつ「辺境的（マージナル）」で、「外周的」なものとしてしか評価されない。神学が西欧的なキリスト教教義を核としている限り、非キリスト教世界（いわゆる第三世界）における教会の民族的、非キリスト教的独自性に受肉する福音の展開も、他宗教との対話も起こらない。既成の諸教会間におけるエキュメニカルな対話も創造的にならない。しかし非キリスト教的な国々の文化や伝承はキリスト教にとって本当に否定的な対象なのか？

聖書における基本的な歴史理解（歴史観）は「断絶と分散化」。旧約では、選ばれたグループが断絶させられ、各地に分散していくことを通して、たえず創造の業を進める神を指し示す→この「断絶と分散化」を通じて、非キリスト教世界において働く神の業が顕在化してゆく→「民話の神学」へと展開

4. 旧約聖書の中の「民衆」にどう近づくか

- 『出エジプト記』の女性の活躍の物語を通して-

4-1. 出エジプト記 2 : 1~10 (モーセの出生譚) における女性の活躍

- ・ 助産婦 (シフラとプア) による嬰兒 (モーセ) 救命の働き
- ・ ファラオの娘 (王女) によるモーセ救命の働き
- ・ モーセの姉の機転によるモーセ救命の働き

4-2. ツィッポラによるモーセ救命譚 (出エジプト記 4 : 19~20、24~26)

*モーセのミディアン部族への亡命 (出エジプト記 2 : 11~22) と結婚

*ケニびと仮説

ケニびとはカイン (創世記 4 章) を名祖とする民族。創世記 4 : 17 ではエノクはカインの子だが、25 : 4 ではエノクはミディアンの子。ネゲブ地方の遊牧民。士師記 1 : 16、4 : 11 にモーセの義父はケニびとであったとの記述がある。ヤハウエ神はケニびとの神だったのではないかという仮説をケニ人仮説という。

4-3. 「ツィッポラ」とは何か?

4-4. 女性活躍の物語は出エジプトの出来事をどのように意味づけようとしているのか?

cf. ミリアムの病気と隔離 (民数記 12 : 1~16)

モーセの結婚への非難 (民数記 12 : 1)

5. 新約聖書の中の「民衆」にどう近づくか

- 『ルカによる福音書』 6 : 39 の「盲人の譬え」を通して -

5-1. Q資料に由来する語録→Q教団の特色

- ・ 黙示家的熱狂主義とその後退を背景に、イエスの振る舞いをロゴス化した
- ・ 終末の遅延により「人の子」の来臨は将来に期待されるようになり、その時までの教団のあり方 (倫理) が「中間時の倫理」として要請されるようになった

5-2. ルカ福音書の文脈

- ・ 結語 (6 : 46~47)
- ・ 現在のテキストの文脈は、主の言葉を行わない弟子 (教会の指導者層) への戒め

→ルカ福音書は、Qの「中間倫理」を、み言葉を「聞いて、行う」者を評価するという主題でまとめた (イエスの言葉の実践への促し)。語録をその補完として配列。ルカの教会の構成員や指導者の内面のあり方を引き締める言葉とした

5-3. Q 語録の文脈に取り込まれる前に、イエスが実際にこの諺を使ったことがあったとしたら、イエスはどのような文脈で使ったのか？ イエスは諺を生み出す母体としての「民衆」とどういった関わり方をしたのか？